

農と食のコラム

山梨の雪 横手の雪

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

2月の14、15日にかけて甲信越地方を中心に記録的な豪雪が襲った。被災された方々に心からお見舞い申し上げたい。

筆者は山梨市に自ら開墾した10アールほどの畑を持つが、まわりはブドウ畑が多く、そのハウスの大半が倒壊する未曾有の被害となった。1メートル40センチもの積雪があったが、この豪雪の1週間前に40センチを超える積雪があり、こんな大雪は久しぶりだと驚いたのもつかの間、これを一気に1メートルも超える積雪があったのだから、ただただあきれるばかり。実際に畑に足を運んだのは5日ほど経過してからとなったが、1メートル前後残る雪を、まずは駐車場所を確保し、家の玄関まで約100メートル、歩く幅だけの雪をかき分けるのに2時間半を要した。雪かきといえば決まって横に掃き分けてきたが、今回は雪を上を放り投げるしかなかった。

豪雪前日の13日は、講演と緑提灯応援隊結成式に参加したため長野県飯島町に泊まった。翌朝、目をさましたところ雪は降り始めており真っ白な世界に。朝飯も省略してすぐに車に飛び乗り、一目散で山梨を通り抜け、東京目指して

中央高速をひた走った。14日夜に秋田県横手市の友人を訪ねて、かまくら等を見に出かけるため、東京の自宅で荷物を作り直して東北新幹線に乗って横手へ。夜の9時すぎに無事到着。とはいえ、中央高速は私が走り抜けた後に閉鎖、東北新幹線も遅い時刻には不通に。ちょっとずれればどこかで立ち往生必至という冷や汗ものであった。

その横手は荒天の甲信越とは打って変わっておだやかな天気でおかげで雪の横手を堪能することができた。特に、木戸五郎兵衛村でのしめ飾り作りと古民家でのいろをかこんで食べた幾種類ものお餅と漬物、そして夜、横手城内のかまくらとそこでの子供たちからの振る舞いは忘れがたいものであった。かまくらでは子供たちが「はいてたんせ、おがんでたんせ」、すなわち「かまくらに入って水神様を拝んでください」と呼びかける。その声に導かれてかまくらに入り、水神様を拝んだ後、甘酒と焼きたてのお餅をいただく。立ち並ぶたくさんのかまくらからは、オレンジ色にろうそくの光がこぼれ、背後にライトアップされた横手城が浮かび上がる。静かに流れ



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）
「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

るわらべ唄が郷愁を誘う。

横手は全国でも屈指の豪雪地帯であるだけに、雪と共生しながら雪の文化を育ててきた。道路の両側に積み上げられた雪は、壁のように垂直に切り立っており、機械をも駆使しての雪国ならではの熟練の技ともいえる。豪雪をうらめしく感じる一方で、大雪があることを前提にした横手の文化を間近に見るにつけ、日本列島は狭いながらも気候・風土が実に多様であり、地域性が強いことを痛感する。日本農業の生き残りを図るには、規模拡大ばかりではなく、この地域性を生かして差別化していくことが大事なポイントとなる。

＜表紙・目次へもどる＞